

FACE TO FACEで貢献

(株)商工組合中央金庫山形支店長

小宮 亮氏



今年9月に山形支店に赴任いたしました。この場をお借りしましてご挨拶させていただきます。私の出身は横浜市です。横浜と言えば異国情緒にあふれ港や湘南の海をイメージされるか

も知れませんが、私の生家の近くには横浜最古の寺院や、その参道の役目を果たす古くて長いアーケード商店街がある横浜の下町で生まれ育ちました。小学校の同級生にはお坊さんや商店を経営する息子が多くおり、私の親戚もその商店街で店を営んでおり良く出入りし遊んでおりました。下町でしたから隣近所との付き合いも密で、商売や時にはお金の面で助け合う姿を目の当たりすることもしばしば、幼いころから大学を卒業するまで人情味あふれる世界で「人と人とのつながりの大切さ」を自然と学ぶことができたのです。

就職した頃はバブル絶頂期で、色んな職種が選択できた筈なのですが、門前町で過ごした幼少期からの体験を生かし企業や商人を相手にする銀行員への道を選び、1992（平成4）年に商工中金に入社しました。

最初の配属は地元の横浜支店でした。銀行員の知識は未熟でしたが、地の利を活かし得意先の新規開拓だけは熱心に行いました。中でも小学生の時に通っていたスイミングスクールの校長が私のことを覚えていてくれて取引開始なんてこともありました。その後、金沢支店や静岡支店など7カ所の営業店で様々な方と出会い貴重な経験をさせていただきました。中でも一番印象に残っていることは、某支店でDESの手法を用いて企業の救済・再生支援に取り組んだことです。DESとは、企業の債務を株式に転換するというもので、当時では例の少なかった手法でした。債務者の協力も必要だったのですが、粘り強く交渉した甲斐あって、大手企業の資本を取り付けることができたときは心から安堵しました。経営再建は事業の収益性、将来見通しが不可欠ですが、何より企業経営にかける経営者の信念が重要で、それを肌で感じながら金融機関の迅速な対応がいかに大切かということ学びました。それ以降、この一連の対応が私の銀行員としての行動の原点になっています。

商工中金は戦前の1936（昭和11）年、南陽市赤湯出身で後の蔵相、日銀総裁の結城豊太郎氏を初代理事長に、日本の生産力向上に大きな役割を果たしている中小企業のために設立されました。山形の印象は農業県というイメージでしたが実際はメーカーの集積地であり、日本経済に欠かせない、きらりと光る有力な企業が多いと感じました。また商工中金には取引先で組織する「中金会」があり、全国約100団体が活動しています。その中でも山形は歴史があり活動が活発な地域として知られており、今回そんな山形支店に勤務できることを大変嬉しく思っています。人工知能などIT技術の導入による生産性の向上が叫ばれている時代ですが、今こそFACE TO FACE（フェイス・トゥ・フェイス）で企業に寄り添い、スピード感ある対応で山形の皆様のお役に立ちたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。



今月の表紙

「シネマ通り界限」(山形市七日町)

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」(事務局・(株)大風印刷)提供。